

「泣いた赤おに」

1 プロローグ

子ども1 「ねえねえ、向こうの山には鬼が住んでいるの？」
おとな1 「そんなこと、誰に聞いたんだ。」
おとな2 「鬼は、怖い奴らだ。絶対に近づいてはだめだよ。」
おとな3 「そうそう、人間を見たらすぐに食べてしまうんだよ。」
おとな4 「あいつらはふつうじゃない。恐ろしい奴らなんだ。」
子ども2 「そうなの？ぼく、絶対に近づかないようにする。」

2 赤おにの家

ナレーター1 ここは、赤おにの家です。
青おに 「こんにちはー。赤おにくん、いるかい。」
赤おに 「ああ…。青おにくんかい。ひさしぶりだね。」
青おに 「ん？どうしたんだい。元気ないじゃないか。いつも楽しい話で笑わせてくれる赤おにくんらしくないじゃないか。」
赤おに 「うん。実は…。」
ナレーター2 赤おには話し出しました。
赤おに 「おれは、楽しくてにぎやかなことが大好きなんだ。でも、この山にはおれと青おにくんと二人しかいないだろ。でも、山のふもとの村にはたくさん人間たちがいる。その人間たちと仲良くなったらどんなに楽しいだろうって思うようになったんだ。」
青おに 「ええ！赤おにくん。おれたちはふもとの村の人間たちとは見た目も体の大きさも全然違う。だから、人間たちはおれたちを怖がっているんだぜ。仲良くなんかなれっこないさ。」
赤おに 「それはわかっている。でも、もし人間たちと仲良くなれたら、村のお祭にだって行けるんだぜ。大勢で歌って踊れるなんて楽しいだろ。それに、おれたちは体が大きいから、人間たちが困っていたら助けてやることだってできるだろ。」
青おに 「そりゃあ、そうだけど…。でも…。どう考えても人間たちが俺たち鬼と仲良くなるなんて無理だと思うけどなあ。」
赤おに 「ああ。俺もそう思ったんだけど、どうしてもあきらめきれなくて、この間山の入り口に立て札を立ててみたんだ。」
青おに 「立て札??」
赤おに 『村のみなさん、鬼の家に遊びに来てください。おいしいお菓子を用意しています。お茶もわかしています。どなたでも大歓迎です。』って。」
青おに 「ほんとかい。それで、どうだったんだい。」

あか
赤おに

「ああ。それで、立て札を立てた後に、こっそりかげから見ていたんだ。でも、人間たちは…。」

おとな 5

「なんだこりや。」

おとな 6

「こりやあ、鬼のわなだ。」

おとな 7

「きっとわたしたちをだまして、食べようと思ってるんだわ。」

おとな 8

「ああ、なんて恐ろしいやつだ。」

おとな 9

「みんな、だまされちゃなんねえぞ。」

おとな 10

「うん、うん。」

あか
赤おに

「そう言った。」

あお
青おに

「そりゃあ、そうなるわな。」

あか
赤おに

「でも、一人くらい来てくれる人間がいるかもって思ってさ。1週間、立て札のそばで様子を見ていたんだ。すると、人間たちは山の入り口に俺たちが入ってこられないように大きな柵をつくりはじめたんだ。それを見たら、悲しくなって涙が止まらなくて…。」

あお
青おに

「赤おにくん。君はそんな人間と仲良くなりたかったんだね。君はすごいよ。俺はそんなこと考えたこともなかった。」

あか
赤おに

「でも、やっぱり人間と仲良くなるなんて無理だったよ。もう立て札もこわしてしまったし…。」

ナレーター 3

さびしく笑う赤おにを見て、青おには何とかしてやれないかと考え始めました。

あお
青おに

「赤おにくん。もしかしたら、人間と仲良くなれるかもしれないぜ。」

あか
赤おに

「え…。ほんとかい。」

あお
青おに

「ああ。俺がふもとの村に行ってひとあばする。そこへ、赤おにくんが人間たちを助けに来る。俺は、赤おにくんにやられたふりをして山へ逃げ帰る。そうしたらきっと、人間たちも赤おにくんのことを信じてくれるぜ。いい考えだろ。」

あか
赤おに

「でも、それじゃあ、青おにくんが悪者になってしまうじゃないか。」

あお
青おに

「別に俺は人間と仲良くなりたいなんて思っちゃいないから平気さ。」

あか
赤おに

「そんなこと…。」

あお
青おに

「何言ってんだ。人間たちと仲良くなりたいんだろ。そうと決まったら、早速今から出かけるぜ。本気でやってくれないとだめだぜ。赤おにくん。」

ナレーター 4

そう言うと、青おには無理矢理赤おにをつれて山を下りていきました。

3 ふもとの村

青おに
ナレーター 5

「おおー！人間たちはどこだ！つかまえて食っちゃまうぞ！」
そう叫ぶと、青おには人間たちがつくった柵をこわし始めました。そして、柵をこわし終えると、人間たちが住む家をこわそうとし始めました。でも、青おには人間たちの家をこわすつもりなどありません。でも、それを見ていた赤おにはとびださずにはられませんでした。

赤おに
青おに
赤おに

「やめろ！！」

「何だおまえは！おまえも人間を食いたいんだろ！」

「俺は、人間たちと仲良くしたい！人間を食いたいなんて思っちゃいない！」

ナレーター 6

赤おにはそう言うと、暴れる青おにの体を全力で押し返しました。二人の大きな体がぶつかり、地面が大きく揺れ、嵐のような風が吹き始めました。

おとな 1 1

「おお。赤おにがわしらを助けようとしている。」

おとな 1 2

「赤おに、がんばれ！」

子ども 3

「赤おに、がんばれ！」

ナレーター 8

人間たちの中から赤おにを応援する声が広がっていきました。その後です。

青おに

「ああー！！」

ナレーター 9

青おには、派手に山の方に吹き飛ばされていきました。吹き飛ばされるふりをして飛んでいったのです。

おとな 1 3

「おおー！！」

おとな 1 4

「赤おにが勝ったぞ！」

おとな 1 5

「よくやってくれた！」

おとな 1 6

「ありがとう！赤おには命の恩人だ！」

ナレーター 1 0

赤おには、人間たちのうれしそうな顔に囲まれていきました。

4 赤おにの家

ナレーター 1 1

次の日から、赤おにの家には大勢の人間たちが遊びに来るようになりました。

おとな 1 7

「赤おにさん、この間は村を助けてくれて本当にありがとう！」

おとな 1 8

「鬼の中にも、こんないい鬼がいるなんて、びっくりしたよ！」

子ども 4

「赤おにさん、一緒に遊んでよ！」

ナレーター 1 2

赤おには、人間たちとおしゃべりをしたり、子どもたちと遊んだりしました。それから毎日、赤おにの家は人間たちで大にぎわい。赤おにとって、夢のような楽しい日々が続きました。

5 青おにの家

ナレーター 1 3

赤おに

ナレーター 1 4

ナレーター 1 5

赤おに

ナレーター 1 6

赤おに

ナレーター 1 7

赤おに

ナレーター 1 8

たの まいにち す あか あお おも で
楽しい毎日を過ごしていた赤おには、ふと青おにのことを思い出しま
した。

「ああ、人間と仲良くなるってこんなに楽しいんだ。青おにくんも来
たらいいのに。あ！青おにくんにお礼を言わなくちゃ。」

赤おには、青おにの家に向かいました。

青おにの家はひっそりと静まりかえっています。

「青おにくん？」

赤おには、青おにの家の入り口のとびらにはあってある1枚の張り紙に
気づきました。赤おには、その張り紙を読みました。

「赤おにくん。人間たちと仲良くなれてよかったね。君が喜んでく
れてぼくもうれしいです。君は、このまま人間たちと楽しく暮らして
ください。ぼくが君と会っていると、君もまた悪い鬼だと思われてし
まいます。そうならないように、ぼくはしばらく旅に出ます。いつま
でもぼくは君の友だちです。いつも遠くの空から君を応援しています。
お元気で。さようなら。」

その手紙を読んだ赤おには、その場に座り込んでしまいました。

「ごめんよ。ごめんよ。青おにくん。」

そうして、赤おには一晩中、青おにの家の前で泣き続けました。

6 赤おにの家

ナレーター 1 9

おとな 1 9

子ども 5

おとな 2 0

おとな 2 1

ナレーター 2 0

子ども 6

ナレーター 2 1

おとな 2 2

おとな 2 3

おとな 2 4

赤おに

つぎ ひ あか いえ にんげん
次の日、赤おにの家にはたくさん人間たちがやってきました。

「赤おにさーん、いるかい。」

「赤おにさーん、一緒に遊ぼう。」

「あれ…。おかしいな。赤おにさん、出かけてるのかな。」

「また、明日出直してこよう。」

人間たちが帰って行く声を聞きながら、赤おには家の中で大きな体
を縮めてうずくまっていた。赤おには、青おにのことを考えると、
食べ物ものどを通りませんでした。そうして、赤おにはみるみる
やせほそっていきました。

「赤おにさーん。」

今日も、人間たちがやってきました。やせほそった赤おには、何かを
決心したように家の戸を開けました。

「やあ、赤おにさん。ひさしぶりだね。心配してたんだよ。」

「どうしたんだい。えらくやせほそってしまっているじゃないか。」

「何か病気なんじゃないかい。村の医者を紹介してあげるよ。」

「村人の皆さん。今日は、皆さんにお話をしないといけません。中
に入ってください。」

- ナレーター 2 2 そう言うと、赤おには話し始めました。人間と仲良くなりたかったこと。その気持ちを知って青おにがわざと暴れたこと。そのあと、青おにがいなくなってしまったこと。そして、人間たちをだましてしまったことを謝りました。
- ナレーター 2 3 だまって話を聞いていた人間たちは、ぽつりぽつりと話し出しました。
- おとな 2 5 「わたしたちをだましたんだね。」
- おとな 2 6 「ひどい…」
- ナレーター 2 4 そうして、人間たちは一人、また一人と赤おにの家から帰って行きました。

7 ふもとの村

- ナレーター 2 4 その後、ふもとの村では…
- おとな 2 7 「赤おにのやつ、おれたちをだましていたんだってよ。」
- おとな 2 8 「ひどいよね。」
- おとな 2 9 「もしかして、おれたちと仲良くなって、全員食ってしまうつもりだったんじゃないか。」
- おとな 3 0 「きっとそうだよ。おお怖い。」
- おとな 3 1 「あぶなかったな。今ならまだ間に合うぞ。」
- ナレーター 2 5 人間たちはそう言うと、また山の入り口に柵をつくりはじめました。前よりもずっとずっと大きな柵です。それだけではなく、大きな1枚の立て札が立てられました。
- おとな・子ども
ナレーター 2 6 『赤おにはわるいやつ。二度と村に来るな。』
人間たちは、赤おにが来たら投げつけようと、たくさんの石も用意しました。しかし…。1年たっても、2年たっても、赤おにが村におりてくることはありませんでした。不思議に思った人間たちは、おそろおそろ赤おにの家に行ってみました。
- ナレーター 2 7 赤おにの家は、雨や風でぼろぼろになっていました。鬼が住んでいるようすはありません。家の入り口には、1枚のぼろぼろになった張り紙が貼ってありました。人間たちはその張り紙を読みました。
- おとな 3 2 「村の皆さん。皆さんをだましてすみませんでした。わたしは、人間の皆さんとなかよくなりたくて願っていました。そんな気持ちを知って、青おにくんがあんなお芝居をしてくれたのです。皆さんと一緒に過ごした日々はとても楽しくて、夢のような日々でした。でも、わたしはそれで大切な友だちを失ってしまいました。安心してください。もう二度とみなさんに会うことはありません。さようなら。」
- ナレーター 2 8 その手紙を読んだ人間の子もたちが話し出しました。
- 子ども 8 「赤おにさんは、ほんとうにわたしたちと仲良くなりたかったんだね。」
- 子ども 9 「青おにさんもほんとうはやさしい鬼だったんだね。」

ナレーター 29 子どもたちの言葉を聞いて、おとなたちも話し始めました。

おとな 33 「おれたちは、鬼のことをまったくわかってなかったのかもしれない。」

おとな 34 「鬼は怖いもの、ずるいものだって勝手に思い込んでいたのかもしれないな。」

おとな 35 「ほんとうに謝らなくちゃならないのは、わたしたちだったのかも。」

おとな 36 「そうだな…。」

子ども 10 「そうだ！」

ナレーター 30 一人の子どもが言いました。

子ども 10 「赤おにさんや青おにさんが戻ってこれるように、立て札を立てようよ！『心のやさしい赤おにさん、青おにさん、おいしいお菓子を用意しています。あったかいお茶も用意しています。いつでも帰ってきてね。』って！」

おとな 37 「そうだな。やさしい人間もいるんだって伝えないと。」

おとな 38 「そうよね。二人にあやまらないといけないし。」

おとな 39 「よし！早速やろう！」

ナレーター 31 そうして、人間たちは村の入り口に大きな立て札を立てました。そして、大きな大きな柵をこわして、いつでも鬼たちがもどってこれるように家をきれいに直しました。そして、もう一つ、村の入り口の大きな岩に言葉をきざみました。

おとな・子ども 「わたしたちの村は、やさしい心^{こころ}を大切に^{たいせつ}にする村です。 鬼好村^{おにすきむら}」

8 エピローグ

() みなさん、泣いた赤おにの劇はどうでしたか。

() 人間たちと同じように、わたしたちも「あの人はあんな人だ」と決めつけたり、誰かが言っているうわさをそのまま信じたりしていないでしょうか。

() それは、ほんとうのことを知らないから、知ろうとしていないからかもしれません。

() わたしたちの心の中^{こころ}には、やさしい心^{こころ}があります。

() 自分の中のやさしい心^{こころ}をみんなで大切^{たいせつ}にしていきたいですね。

() これで、〇っ子劇団の劇を終わります。

ぜんいん 全員 ありがとうございます。